

亡時の連絡方法などに関して家族に十分な説明をしていれば、家族だけの看取りも可能になる。という報告を紹介しているが、筆者の経験からみると、この報告は看取りの実際を樂觀しすぎていると思う。看取りの実際に熟練した人が一人は是非とも必要である。

おわりに、本書の内容についていろいろと意見を述べさせていただいたが看取りをじっくり検討するのに必要な考え方を示され、さらに貴重な資料を数多く提供していただいた努力にたいし、心から感謝するとともに今後ますます研究が発展されることを期待したい。

(杉田 暉道)

〔法政大学出版局 千代田区九段北三二一七、電話〇三一五二二四一五五四〇、二〇〇一年四月二十五日、A五判、本体二六〇〇円〕

吉田 忠・深瀬 泰且 編

『東と西の医療文化』

日本にある八十の医科系大学の中で唯一の医史学研究講座を専任教官として主宰してこられた順天堂大学酒井シヅ教授の御退任を期し、吉田忠・深瀬泰且両氏の編集で、まとめあげられた記念論文集である。

執筆者の選定がどのような意図であったかわからないが、

十八名の学究がそれぞれ専門とする領域において、西洋と東洋の医療を文化史的なパラダイムを意識して寄稿された質の高い好論文集である。

巻頭には酒井シヅ教授の「医史学と私」の小文が据えられている。「私と医史学」「医史学会と私」の二章に分けて医史学者として努力に努力を重ねて来た一筋の道の歩みを静かにつましく語っている名文である。

脳神経の研究から医史学研究に転身するにあたって、小川鼎三先生という傑出した師匠との出会いがあったことは、仏教でいう真理に至る四つの階段の第一歩を正しく踏んだといえる。

仏教で真理に至る第一段階は「説近善知識」|| 正しい師に会う、第二は「正聞熏習」|| 正しいことを聞く、第三は「如理作意」|| 聞いたことについて自からその背後にあるものを考える。最後の段階は、「通達真如」|| 根本的なことから考えて自己開発を客観的に考え、真理を発見する。酒井医史学はこの道をたどった。

小川先生亡き後での「説近善知識」ともいえる学究仲間や、同志ともなった人々が、十八人の執筆者である。酒井シヅ教授にとって学際的な御同朋、御同行であり、正統な学術の道を歩ましてくれた協同研究者たちである。

したがって、この論文集の執筆者は多岐多彩であるし、執筆テーマも内容も個性的である。その一つ一つが将来の研究展開の可能性の示唆に富むものが多い。

内容は五項目に分類されている。

第一項は漢方医学研究ベテランによる三編、

中国医籍年代総目録(十六世紀以前)

和漢薬の来源

浅井周伯の養志堂講義録

第二項は江戸期の西洋医学受容関係四編であるが、白杉悦

雄は庸医、近藤均は三浦梅園について独自の視点からの所論を記している。

神の模倣としての体——七世紀初頭のアナトミアと日本で最初に翻訳された解剖学書

もう一つのハイステルの書

の二編が、実証派医史学研究者の注目を集めるに十分な、濃い内容を持つている。

第三項は社会的な関心に連なる三編で、

江戸の銭湯にみる養生と清潔

は江戸風俗史視点と衛生史的な視点を上品にまとめているが、銭湯と売春、性病の関係の切り込みを深くする必要も文

化史的に忘れてはならぬであろう。研究の展開を期待する。

梅毒の文化史的研究序説

は世界梅毒史に連なる日本の梅毒の伝播と防疫に関する今後の研究が、土肥虔蔵の『世界梅毒史』を越えて行かねばならぬことを示唆している。

老いと痴呆へのまなざし

はアップトゥデイトの社会福祉問題への糧となる。

真柳 誠

小曾戸 洋

山田 慶兒

月澤美代子

吉田 忠

鈴木 則子

福田 清人

新村 拓

第四項は明治期の医事制度に関する二論文、

明治期の侍医制度と池田文書

歩兵屯所附医師の医療活動

は積年の調査分析研究を基盤にしたもので、特に遠藤の論文は宮廷社会における西洋医学受容の迂余曲折の事情とその生々しさが伝わる。

占領期の病院改革

青年期から壮年期から身を以て体験した筆者にとつては未

だ生々しく日本病院事始として、脳裏に甦ってくるが、既に自分自身がその歴史的な証人の一人であることを知った。

東アジアにおける近代女子医学教育の成立と展開——中

国・朝鮮を中心として

は西洋文化との接触がなければ進展しなかった東洋的宿命に日本との時差が大きかったことを知る好論文で、東アジアの女子医学教育は日本が先導したと言える。

第五項は三人の外国人研究者による三編。

On the Reception of Medicine in Seventeenth Century Japan

Wolfgang Michel

は十七世紀の日本での西洋医学特に南蛮外科・紅毛外科の受容について、長年の研究の成果を要領よくまとめている。通

詞及び長崎遊学の医師たちの受容した西洋医学は、この時代の日本の漢方医学の根幹をゆるがすほどの影響力は未だ与え

なかったとしている。Von Leipzig nach Japan. 1999の著者

である。

遠藤 正治

深瀬 泰旦

杉山 章子

三崎 裕子

Disease Dissemination in the Early Modern World

Connecting East and West Ann Jannetta

は、ピッツバーグ大学歴史学部準教授で、かつて酒井教授の指導で研究した成果を基にしての執筆である。十七世紀後期の西洋とアジア共に都市化による人口集中と海上・陸上交通の飛躍的発達による西洋及び近隣諸国との交渉により、伝染病の広域化をもたらしたとの主張を文化史的視点で論述している。

Causal Theories of Beriberi during the Early Meiji Period: The Early Formation of a Network around the Theory of Beriberi being an Infection

Christian Oberlander

東大医学部研究員でもあった人で、脚気学説の変転と社会問題化を明治初期の位相でとらえて要領よく論述している。

末尾に酒井教授の略歴、業績目録が附されており、日本を代表する医史学者としての多岐にわたる研究のほぼ全貌を知ることができる。退任後の一層の活躍を期待したい。

充実した記念論文集であり、医史学研究的文化史的視点での取組みの指針ともなりうる著作でもある。

(蒲原 宏)

〔思文閣出版、京都市左京区田中関田町二一七、電話〇七五一七五一―一七八一、二〇〇一年五月十一日、A五判、四三九頁、本体八五〇〇円〕

瀧澤 利行 著

『養生の楽しみ』

「江戸時代には様々な養生論・養生法が書かれた。これらを手際よく紹介して先人に学ぶとともに、私達の「養生」のあるべき姿を考える。」と本書の表紙の見返しに書かれているように、読後には「養生」に関する一通りの知識が身に付いたような、嬉しい気分させられる書である。

主として江戸時代の後期の養生書に依りながら、日本の江戸時代の養生思想を紹介しているのだが、まず改めて感心するのは、「養生」の思想が日々の生活のあらゆる側面をカバーしているという事実である。本書が導いてくれるテーマは、章ごとに食べ物や運動、性生活、温泉、呼吸法、睡眠、医者選び方など様々で、いずれも卑近なことがらである。にもかかわらず博学の著者の案内によって、江戸時代だけではなく時には古代中国へ、時には現代日本へと次から次へと時間と空間を越境して話が広がっていく。頁を繰りつつ知的興味は尽きない。

たとえば呼吸法。神仙術の呼吸に関する養生法である「調息」について、中国の道家思想や禅家の「数息観」、これらを江戸時代の養生家がどう取り入れているか、的確に古今内外の文献を引きながら紹介する。だが本書の面白さはそれだけではない。

「まず、息の吸い方、吐き方は神仙術の吐納法と同じく大き